

体験活動を通じた小中連携による  
中1ギャップ予防プログラムの報告  
— 異年齢間ピアサポート活動「中学生と語る会」が  
小6にもたらす効果検証 —

**Report on Experience-based Learning Activities to Prevent Transition  
Problems in Collaboration between Elementary and Junior High School**

門原眞佐子・高木 亮・上森宏樹

# 体験活動を通じた小中連携による 中1ギャップ予防プログラムの報告

## — 異年齢間ピアサポート活動「中学生と語る会」が 小6にもたらす効果検証 —

門原眞佐子（初等教育学科），高木亮（初等教育学科），上森宏樹（早島町立早島小学校）

### Report on Experience-based Learning Activities to Prevent Transition Problems in Collaboration between Elementary and Junior High School

Masako KADOHARA (Department of Elementary Education),  
Ryou TAKAGI (Department of Elementary Education)  
Hiroki UEMORI (Hayashima Elementary School)

#### 要旨

中1ギャップは小学校と中学校の接続間に生じる適応の課題である。本研究はこの解消のために行われている「中学生と語る会」という中学校1年生と小学校6年生の関わる体験活動（総合的な学習の時間）に注目し、その会の前後でどのような変化が起きるかを検討することを目的とする。質問紙として中学校生活期待感と中学校生活予期不安さらに理想の中学生像に関する質問、自由記述などの回答を会の前後に求めた。「中学生と語る会」の参加によりt検定の検討の結果不安感が解消される因子が確認され、また期待と不安の関係が会の前の負の相関関係から正の相関関係に転換することが確認できた。以上より、「中学生と語る会」のような体験活動が漠然とした進学的不安感を具体的な緊張感に転換できると解釈し、考察と今後の課題の検討を行っている。

#### キーワード

小学校体験活動，総合的な学習の時間，中1ギャップ，ピアサポート，ソーシャルスキル教育

#### 1. 問題と目的

いわゆる学校園間の接続時の不適応の可能性は古くより指摘されている。小学校の教育課題を考えた場合、保育所や幼稚園から小学校に進学した直後に生じる「小1プロブレム」とともに、小学校から中学校に進学した直後に生じる「中1ギャップ」の問題は学校園の現場でも実感として大きなものであるし、文部科学省公刊統計の『生徒指導上の諸問題に関する調査』でもはっきりと確認することができる課題である。課題意識や改善のための

学校園の接続をめぐる連携を考える議論は多い。本研究では主に小学校のうちから中学校進学後の学校生活に展望を持つことで中1ギャップを改善するという発想を目指す。この改善には様々な方法論があるといえるが、本研究では不登校児童生徒数減少に効果のある異年齢間ピア・サポート活動に注目し、岡山県下の一部学校で行われている「中学生と語る会」という小学校での体験活動に注目、その効果を測定し検討することを目的とする。

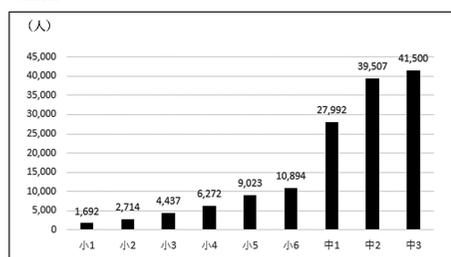
今日の学校現場では、学校における児童生徒の適応上の問題が課題となり、不登校の児童生徒数も不登校出現割合も増加している。平成29年度には、不登校児童生徒数は14万人を超え、全児童生徒数が減少する一方で、不登校児童生徒数の割合は上昇している。

年 度	全児童生徒数(人)	不登校児童生徒数(人)	不登校児童生徒の割合(%)
平成25年度	10,229,375	119,617	1.17
平成26年度	10,120,736	122,897	1.21
平成27年度	10,024,943	125,991	1.26
平成28年度	9,918,796	133,683	1.35
平成29年度	9,820,851	144,031	1.47

図表 1. 不登校児童の出現割合

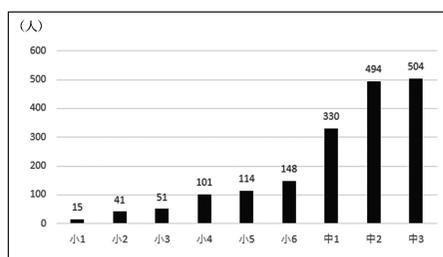
中でも小学6年生から中学1年生への移行期である小・中学校間の連携・接続部分にかけて不登校児童生徒数が増加している。全国では17,098人が岡山県でも182人が増加しており、他の学年間に比べて中1ギャップが存在することが分る。

〈全国〉



児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（速報値）文部科学省，2018

〈岡山県〉



児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査結果について(概要) 岡山県教育庁義務教育課，2014

図表 2. 小6・中1間接続の課題としての不登校

一方、「小中一貫教育の導入状況調査」（文部科学省，2017）によると、全国の72%の自治体で、小・中連携教育を行っており、何らかの形で小・中連携が進められ、中1ギャップの解消へ向けた取り組みが進められている。総社市では、平成22年度から「だれもが行きたくなる学校づくり」（通称「だれ行き」SEL、協同学習、品格教育、ピア・サポート活動など）とされている（総社市教育委員会，2015）に取り組み、不登校率低減に効果があった。

ピア・サポート活動とは、「子どもたちが対人関係能力や自己表現能力等を身に付けるために、教師の指導・援助のもとに、子どもたち相互の人間関係を豊かにするための学習の場を、各学校の実態や課題に応じて設定し、そこで得た知識やスキル（技術）をもとに、仲間を思いやり、支える実践活動である」と定義している。（日本ピア・サポート学会（2010）<http://www.peer-s.jp/idea.html>）

なお、ピアサポート活動については同年齢間で行うタイプと異年齢間で行うタイプがあるが管見の限り小学校6年生に対する異年齢のピアサポートを検証した研究は見つからなかった。そこで、本研究では、総社市が独自に行なう異年齢間ピア・サポート活動「中学生と語る会」という小学校での体験活動に注目し、小学6年生の中学校生活に対する期待感・不安感、理想の中学生像へどのような影響を与えるのかなどの効果を測定し検討することを目的とした。

## 2. 方法

### （1）小6体験活動としての「中学生と語る会」

「中学生と語る会」は、特別活動や総合的な学習の時間の一環として行われ、中学1年生が母校の小学校へ出向き、来年度中学校へ入学してくる小学6年生と一緒に中学校生活について語り合う会である。以下にプログラムを示す。

1 : 55	開会・あいさつ
1 : 57	生活の様子を中学生が説明
	①時程（休み時間、朝読書の時間、授業時間）
	②登下校（徒歩通学と自転車通学、ヘルメットの着用）
	③校則（スマートフォン、ゲーム、お菓子を持ち込めないこと）
	④学習（教科担任制、名前が変わる教科、テストのこと）
	⑤委員会、生徒会
	⑥部活（部活の種類、活動時間）
	⑦学校行事（宿泊研修、チャレンジワーク、修学旅行、体育祭）
2 : 15	班に分かれてフリートーク（18グループ）
2 : 30	中学校クイズ4問 （教科、部活、中学校の先生に関する質問）
2 : 40	閉会・あいさつ

図表3. 「中学生と語る会」（平成30年1月30日実施）のプログラム

## (2) 調査の実施概要

調査協力者

総社市公立小学校 4 校 小学 6 年生 259 人

質問紙調査時期

事前調査：2018年 1 月下旬

事後調査：2018年 2 月上旬

質問紙

測定には中学校生活期待感尺度（和田・小倉，2016），中学校生活予期不安尺度（南ら，2011）を用いて測定・検証を行なった。また，「中学生と語る会」をより小学 6 年生のニーズに合ったものとするため，理想の中学生像を調査した。中学校生活への不安感を低減させる効果があり，中学校生活へ向けての意欲を高めたり，良好な人間関係を築くために自分自身がどのように行動すればよいのかを学んだりすることができると考え，そのプログラム自体を考察することとする。結論をまず言えば，小学 6 年生の小学校から中学校への移行を円滑にする効果が確認できた。質問紙の構成質問項目群を以下に示す。

- (1) 中学校生活期待感尺度 3 因子 12 問 4 件法
- (2) 中学校生活予期不安尺度 2 因子 16 問 4 件法
- (3) 理想の中学生像に関する項目 自由記述

## 3. 結果と考察

### (1) 事前・事後アンケートの比較

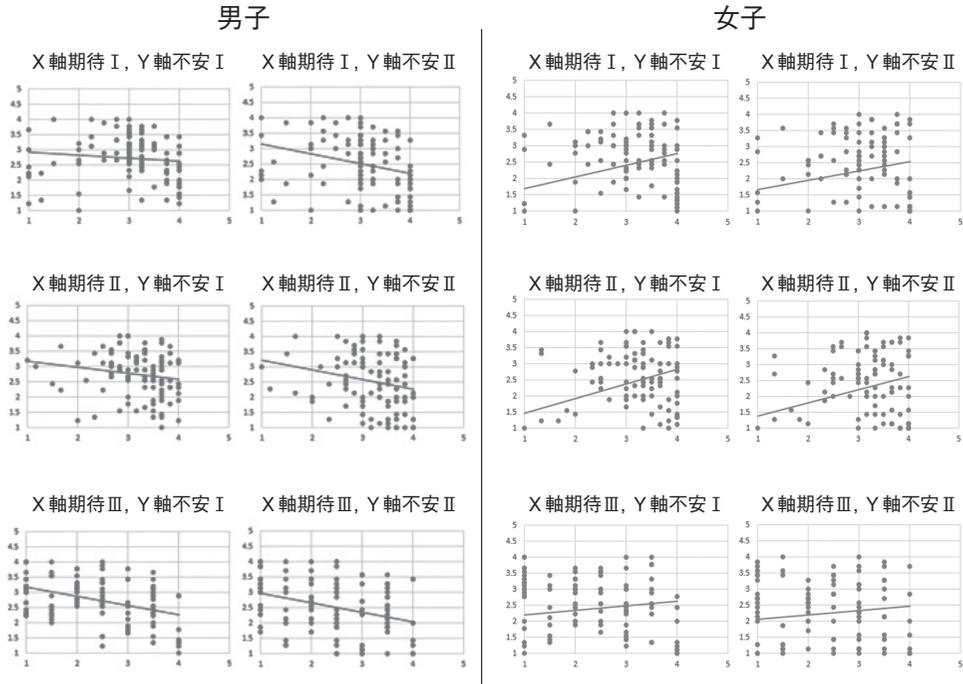
期待感と不安感について中学校生活への期待感に関しては，男女ともに「中学生と語る会」の前後で比較の t 検定を行った。中学校生活への不安感に関しては，男児で社会・文化的不安因子に有意な差があった。また，女児に関しても，学校生活期待について 10% 未満の有意傾向がみられた。いずれも不安が下がり，期待が上がるという望ましい結果であるといえる。しかし，対人的不安に関しては，男女ともに有意な差つまり，望ましい影響は確認できなかった。

	〈期待感〉					〈不安感〉						
	事前(n=127)		事後(n=119)		t値	事前(n=127)		事後(n=119)		t値		
	M	SD	M	SD		M	SD	M	SD			
男子	対人期待	2.872	0.825	3.006	0.824	1.6297	社会・文化的不安	2.823	0.812	2.541	0.764	7.6901 **
	学校生活期待	3.007	0.743	3.116	0.712	1.3944	対人的不安	2.413	0.861	2.275	0.855	1.5891
	学習期待	2.512	0.852	2.634	0.920	1.0632						
女子	対人期待	2.995	0.818	3.119	0.807	1.0613	社会・文化的不安	2.739	0.722	2.556	0.837	2.7860
	学校生活期待	3.207	0.628	3.229	0.690	0.0549	対人的不安	2.515	0.693	2.397	0.946	0.9699
	学習期待	2.462	0.970	2.361	0.994	0.5294						

図表 4. 対応のある t 検定による期待感と不安感の前後比較

次に，X 軸に期待感と Y 軸に不安感の相関関係を散布図・近似曲線で見たい。項目ごとに男女と前後比較を基に検討する。男女ともに散布図の事前調査において，「中学生

と語る会」の事前調査の結果である期待感が高まると不安感が低減する負の相関が示された。事後調査ではこれとは逆に、期待感が高まると不安感も高まるという正の相関を示した。



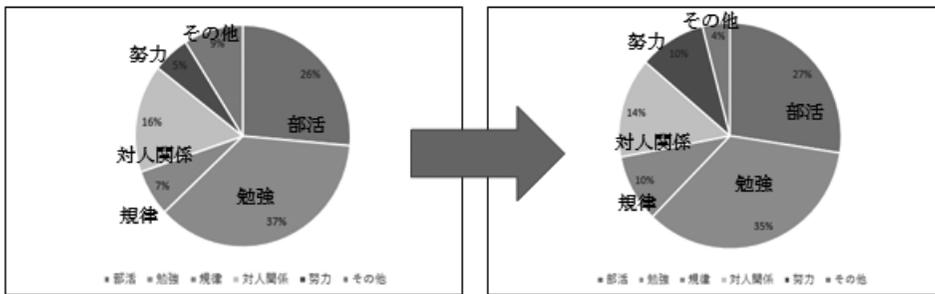
図表5. 前後間による期待・不安相関の逆転現象（左2列男子，右2列女子）

このことは、「中学生と語る会」は具体的に中学校の生活がイメージが付かなかったため、「期待ができない不安」か「期待するために不安を感じないか」のいずれかという感情的な物であったといえる。一方で、「中学生と語る会」以降は「期待をしなければ不安が無い」と「期待をすれば不安が生じる」という感覚に代わることを意味する。つまり、多くの児童が「期待を持つうでの緊張感として不安が高まる」とともに、適応課題があると思われる「無気力に期待がなく不安も感じない」群に分かれることを意味すると解釈できる。実施前後に中学校への「期待があがった」「不安が下がった」よりもこの不安が緊張感に転換したと推測できる感覚に教育的意義を見出すことができるように思われる。

## (2) 理想の中学生像の変化

さて、今後の小学生の中学校進学の前向きさを推進していく上で、小学生はどのような中学生になりたいのかについて理想を尋ねている。その「中学生と語る会」の前後の回答特典の変化も含めて結果を見てみることにしよう。

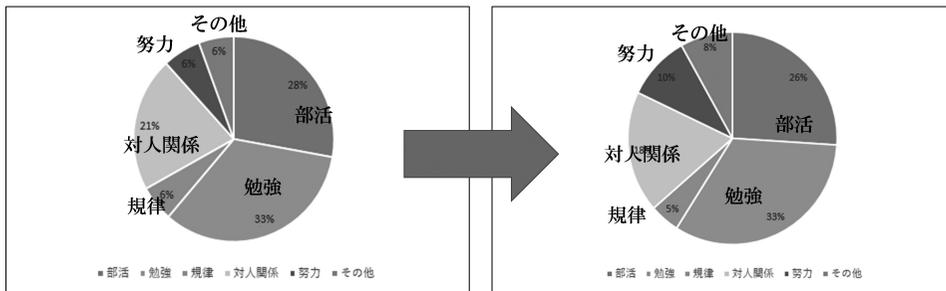
男児では、事前から事後にかけて部活、規律、努力の3項目で回答の割合が上昇した。一方、勉強、対人関係、その他については減少した。



図表 6. 男子の理想の中学生像の変化 (左, 事前, 右, 事後)

つまり、「その他」という曖昧さが減少し、努力や規律というもともとイメージしにくい要素が強くなっていることが分る。

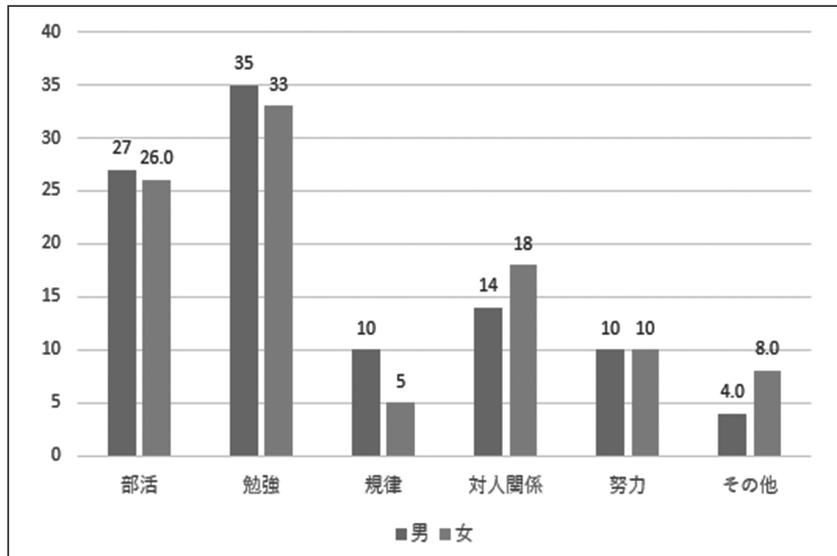
次に、女兒では、努力とその他の2項目が上昇し、部活、規律、対人関係に関しては減少した。



図表 7. 女子の理想の中学生像の変化

女兒ではその他の減少はおきておらず、規律も増えてはいないが、努力が要素として増していることが分る。

次に内訳を示す円グラフから前後の増減を把握しやすい棒グラフを示す。



図表 8. 男女の理想の中学生像の点数差の概要

男女での比較では、部活、勉強、規律の3項目で男児が女児を上回った。一方、対人関係、努力、その他の3項目については女児が男児を上回った。

以上を概観すれば「中学生と語る会」は中学校を“楽しいところ”と把握するよりも“現実的な緊張感を持つべき場”としての理解を促すきっかけとなったと評することができる。

## 4 総合考察

### (1) 期待感と不安感

t検定において期待感が有意に上昇しなかった。100人を超える回答者数を考えればデータ数の不足ゆえに有意差が示されなかったとは考えにくい。この成果がはっきりとしなかった要因としては、一度の取組であったことと、ピア・サポーターが中学1年生であることが考えられる。中学1年生は、中学校へ入学して1年も満たないまま「中学生と語る会」を迎えるため、中学校の魅力を網羅することができない。また、そもそも中学校1年生自身が現在の“中1ギャップの課題の只中”といえる立場と考えられる。このことが小学6年生の期待感を高めることができなかつたのだと考えられる。今後、例えば中学校2年生などとの交流の機会や複数回の関わりを持つと測定尺度の効果をより高めることができるのかもしれない。

また、期待と不安の相関図では、女児の事後調査において中学1年生の説明を聞いたり、話をしたりすることで中学校生活への期待も高まるが、不安も大きくなったのだと考えられる。この性差について、女児のほうが男児よりも不安が高くなることはこれまでの研究で示されている(和田・小倉, 2016 三宅, 2017)。ただ、ここでは不安(一般的には漠然とした理由のない緊張感)と称したが、「中学生と語る会」後においては期待感との相



関が確認できた。期待ゆえの緊張感は不安というよりは建設的な緊張感という事も出来るのかもしれない。緊張感も不安の心理的ストレスと捉えがちであるが、ひょっとしたら今後は建設的で意味のある緊張感を小学校6年生に課してていくことが、規律や努力などの適応につながる要素として注目してもいいのかもしれない。

## (2) 理想の中学生像とその変化について

理想の中学生像の「中学生と語る会」前後の変化について把握してみたい。男児も女児も共に事前調査から事後調査にかけて、漠然としていた記述がより具体的な記述へと変化していた。また、中学校生活への意欲が高まったと考えられる。

例えば、男児は規律「時間を守れる中学生になりたい。」が増えており、自由記述などでは「時計を見て行動できる中学生になりたい。」などの回答が増えた。また女児においては対人関係「友だちの多い中学生になりたい。」が増えており、「話しかけられたら笑顔で返事ができる中学生になりたい。」などの自由記述回答が見られた。「中学生と語る会」は漠然とした不安から緊張感を具体的に増すことを促す効果があったといえる。当然、ストレスでありプレッシャーではあるので“適度な緊張感”が重要であるが、“ただ楽しい”以外の要素が見られたことは事前に想定していなかったが有意義なことであるように感じられる。

また、小学6年生の多くは、中学校生活の部活、勉強に関心を持っていることが分かった。男児は規律、女児は対人関係に関心を持っている児童が多くなっていた。努力に関しても、一定数の児童が関心を持っていることから、小学6年生のニーズに沿って「中学生と語る会」の内容を変化させるべきであると考えた。

## (3) 今後の課題

「中学生と語る会」をより効果的にするために以下の3点の改善を提案したい。

一点目は「中学生と語る会」の質を保つためピア・サポーターの中学生選定選出方法を立候補制とする。また、中学校2年生以降の参加の効果も今後検討してみれば有効であろう。

二点目は小学6年生が興味・関心に沿った話を聞くために、場の構造化を図ることである。例えば構成的エンカウンターグループのように時間や目的・目標の枠組みは決めつつもワークショップの個々の内容をプログラムとして詳細化する課題である。これにより、今回数量評価したような期待や不安などの特定の課題に介入する体験活動を演出できると展望できる。

三点目は「中学生と語る会」の後の不安を解消するために、小学校担任と中学校教師によるフォローアップを行うことである。これについては今回の実践参加で十分に測定できなかったが、現場では当然のように行われていることであるように感じる。前後比較を行ったわけであるが、もう少し後にどのような変化があるのか、また参加者が中学校進学

後にどのように変化するのか、測定指標を教師の参考データとして取り組めば、よりきめ細かな対応につながるとも考えられる。

最後になったが今後は、異年齢間ピア・サポート活動「中学生と語る会」が中学1年生のピア・サポーターにもたらす影響についても調べていき、より効果的なプログラムを検討したい。

### 参考文献

- 枝廣和憲・中村孝・玉山瑞衣・栗原慎二 2012「ピア・サポート実践が小学生の学校適応感へ及ぼす影響－包括的生徒指導・教育相談の観点から－」
- 南雅則・浅川潔司・秋光恵子・西村淳 2011「小学校の予期不安と中学校入学後の学校適応感との関係に関する学校心理学的研究」
- 三宅幹子 2017「小学6年生における中学校生活に対する期待と不安」
- 文部科学省 2018「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（速報値）」
- 文部科学省 2017「小中一貫教育の導入状況調査について」
- 文部科学省 2012「小・中学校間の連携・接続に関する現状、課題認識」
- 中尾亜紀・戸田有一・宮前義和 2008「日本の学校におけるピア・サポートの体系的な理解の試み」
- 仲律子 2013「大学におけるピア・サポート活動について－鈴鹿国際大学での発達障害や精神障害の学生への支援を中心として－」
- 日本ピア・サポート学会 2010「ピア・サポートの理念」<http://www.peer-s.jp/idea.html> (2018.12.10閲覧)
- 岡山県教育庁義務教育課 2014「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について（概要）」
- 総社市教育委員会 2015「だれもが行きたくなる学校づくり入門」
- 和田邦美・小倉正義 2016「小中移行期における児童の学校適応感に関する研究－中学校生活への期待感・不安感に着目して－」

### 附記

本研究は第一執筆者の指導のもと第三執筆者が作成した平成30年度卒業論文を第二執筆者が論文として再構成したものである。初等教育学会助成を受け平成31年1月の日本学校改善学会第2回大会において筆者である学生メンバーで口頭発表を行うことができた。心よりお礼を申し上げます。